

動物遺存体の調査（8）

埋蔵文化財センター

本年度行った動物遺存体関連の主要な調査には以下のものがある。

千葉県文化財センターの行った多古町南借当遺跡の調査では、自然河川の前中世から中世にかけての堆積土からウシ、ウマ、イヌ、ニホンジカ、イノシシなどの骨と、ニホンジカの
中手骨と鹿角を加工した中世特有の鎧の部品、簪などが出土した。この結果、この遺跡では中世の人達が斃牛馬の処理に当りながら、鹿角や骨の細工にも係わっていたことが明らかになった（松井章1991「南借当遺跡出土の動物遺存体」『多古町南借当遺跡』千葉県文化財センター pp.130-142）。

藤原調査部が藤原京右京7条1坊西北坪において検出した便所遺構と思われる土坑の土壌の分析を、粉川昭平氏（大阪千代田短期大学：植物分類学）、金原正明氏（天理大学：花粉学）、中野益男氏（帯広畜産大学：コプロステノール分析）、宮武頼夫氏（大阪市自然史博物館：昆虫学）らの協力を得て行ない、内容を明かにした。その結果、各種の糞虫、消化器官を経て排泄されたコクゾウムシ、ウリ、アサ、ナス、カタクチイワシの椎骨などの存在を明かにした。さらに寄生虫の検出を幾人かに依頼した結果、金原正子氏（元病院臨床検査技師）が、土壌中に大量の回虫、鞭虫、横川吸虫、肝吸虫などの卵が含まれていることを発見し、考古学での日本で最初の寄生虫の報告となった。微細遺物の採集には、一般にはふるいを使う水洗選別法、昆虫や種子などの比重の小さい遺物を舞上がらせて採集する浮遊遺物選別（フローテーション）法などが有効で、さらに小さな花粉、寄生虫卵などについては重液分離法が必要であることを確かめた。金原氏らは平城京二条二坊坊間路西側溝にも同様の寄生虫卵が存在することを再発見し、その結果を得て、松井はその上流の樋状遺構（第202-13次、1989年度概報）を弘仁6（815）年「太政官符」の記述、「立格既畢。而近渠之家。大穿水門好絶溝流。垣基因茲頽毀。道上為之湿悪。公私之煩莫不縁此。絶如此之類重加禁止。但无害公私者聽置樋引水。不得因茲流出汚穢湿損道路。若有違犯之者。」に合致するものとし、これを平安時代の便所の別名、「樋殿」の具体例と考えた。

右図はその想像図である。道路側溝の水を、木樋によって築地の内に引き込み、おそらく上澄みのみを再び側溝に環流させる。樋殿には床があり、あふれた場合に汚れがひろがるのを防いでいたであろう。

（松井 章）

